

第十二章 叢書きそい起る

一一 等 国

一躍ここにわが国は

一等国に列したり

かくも栄ゆる大御代に

生をうけたる国のため

小学生のうとうこの洋々たる唱歌の声をもって明治三十九年はあける。丙午で、本来なら不吉の年としてひどく嫌われるのだが、なにしろ平和克復の第一年として、また維新のかた待望の一等国の仲間入りの目標がいちおう達成せられた年として、わるい縁起などは吹っ飛び、この年のように活気あり、弾力あり、希望にみちあふれた新年を迎えたことは、あとにもさきにも例がない。

この年に特筆すべきことは、エヴェリマンス・ライブラリーが創刊されて、輸入されて来はじめたことだ。欧米で刊行される叢書の数は無数で、日本に舶載されてわが文化に恵福をあたえたのも何十種類とあるだろうが、長期にわたって最も親しまれて、いまでも刊行がつづけられていて、わが国のあいだに愛読者をたたないのはドイツのレ

クラム叢書と、イギリスのエヴェリマン叢書である。歴史はレクラムがはるかに古く、その創刊は一八六七年の慶応三年で、丸善の創立よりも二年ふるい。ただドイツ語をよむ者が、学者、軍人、医者、大学生に限られ、英語が第二の国語といわれるのほど広汎でないから、その普及度においてエヴェリマンにははるかに及ばないであろう。いうならばこの「各人叢書」は、丸善が叢書として取りあつた最大なもので、その点辞書として取りついた最大なものがブリタニカであるのに似た地位を占めるであろう。されば、昭和三十一年にこの叢書は創業五十年を迎え、ちょうど一千冊を刊行して盛大なる祝典をおこなったので、丸善でもそれに応じて、この叢書に関する展覧会をもよおした。その記念記事として、「学鑑」にのった一文に少修を加え、左に転載する。

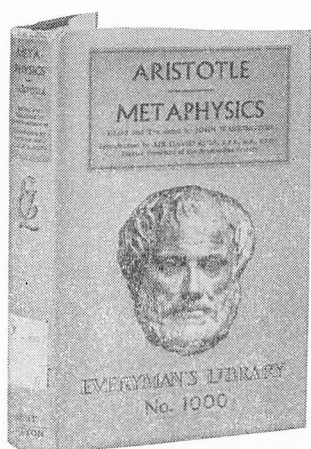
一 エヴェリマン叢書

この記事は「エヴェリマン五十年祝典」(木村毅)と題されて次のとおりである。

一 驚くべし一千冊

英語をまなんだ者なら、必ず手にしているエヴェリマン文庫が、初刊以来、今年でちょうど五十年になって、出版元のデント社では盛大な記念式典がおこなわれ、新聞雑誌もそれを報道している。

私は、じつは五十年という歴史には、ちょっと驚かなかった。一九〇六年の創刊なら、日露戦争の翌年の丙午にあたる年で、全国的に大雪がふったので、記憶にのこっている年である。日本にだって、これより古い



Everyman's Lib. No. 1000

出版社は多い。私は何ということなく、吾吾のうまれる前から、あった叢書のような気がしていたので、驚いたといえ、むしろこの叢書の歴史の思ったより、少々わかいのに驚いたのだ。

ただし半世紀に一千冊を刊行した努力には感心する。ボスウェルのサミュエル・ジョンソン伝を第一巻として、最初には五十冊をいっぺんに刊行したが、それからはず、年平均十五冊から二十冊のペースを守って、千冊目はアリストートルの「メタフィジクス」でこの叢書に一おうのピリオドを打った。金と青の特別のカヴァをかけた美しい本で、良書の貫禄としては申し分ないが、しかしあんまり売れそうにはない。この、売れないものも平気で出すところが、この叢書の特色である。

もっとも、長谷川如是閑氏のところをたずねた時、書架にのせて、既読のページは手の形をした金具ではさんで、克明に書き入れをしながら読みつづけておられるらしい書物をのぞいてみたら、エヴェリマンの中のやっぱりアリストートルの「ニコマキヤン・エシックス」であった。今こんなものを読まれるのかと、意外な気がしたが、この文庫によるアリストートルの読者もあることはあるのだ。

二 古い宗教劇から

エヴェリマンの成功の一つは、その文庫の名前のいいことだったと、創始者のデントが語っている。

「いいタイトルは、よき詩と同じく天から授かるのだ。妙案を

考えだし、ひつつかまえ、そして適当な文字にするのは、なまやさしいことではない。みんなで、この新叢書の名を幾つか考えたものの、どうも気に入らぬ。ある日、ガーリッグ街をあるいているとき、私は、ふっと古い宗教劇の一句をおもいだした。

Everyman, I will go with thee and be thy guide.

(もろ人よ。われ汝らと共にゆき、汝等のみちびきたらん)

これが私にヒントを与えた。私は番頭のすわっている事務室にかけこんで、Eureka (見つけた) と叫んで、この句をひき、文庫の名はこれにかざる。Everyman's Library だといったら、番頭は、しばらく腑に落ちなさそうに、私を見つめていてから『なるほど、いい名ですな』と同意してくれた。」

そして、有名な古典や準古典の名作が一シリングの安値で得られて、しかもその表紙がクロースとじで、背には金模様が入り、一おう書架のかざりにもなる。

もちろん、高価な本には、これよりいい装幀のは、いくらでもあるが、安価本で、このようなのが、他になかったのが、羽翼を生じて、世界にひろがった所以であった。

三 私のよんだ本

ところで、私自身の思出になると、最初に手にしたエヴェリマンは何であつたらう。

私が早稲田に入つたころは、あそこの文科は「はしり」ばかり追つて、イギリスの作家でもイエーツの「心願の国」や「カスリーン伯夫人」、アーサー・シモンズの「フランス象徴詩派の運動」のようなものを教科書

にもちいたのだから、それらはエヴェリマンにはまだ入っておらず、高い教科書代をはらわねばならぬので弱った。

しかし増田藤之助先生にならったエマーソンはエヴェリマンをテキストにもちいた。同じ増田先生うけもちのブラウニングの「指輪と書巻」もそうだった。もっとも私は、買いはぐって、惜しかったけれど、これは、もっと高い本を買わされた。

明治の終りから大正のはじめにかけては、大陸ものの英訳は書目に見あたらなかったのに、ドストエフスキイの“Letters from the Underworld”が、わりあい初期に出て、エヴェリマンの性格が、すこし変わってきたような気がした。私は大正三年に兵隊にとられ、新兵時代を鳥取で過ごしたが、日曜日に外出したとき、師範学校の前にある本屋で、エヴェリマン版のディッケンズの「オリヴァ・ツイスト」を見つけ、よろこんで買ってきて読んだ。この文庫を首尾みんな読み通したのは、これが最初である。同じ本屋で別なときトルストイの「幼年・少年・青年」をみつけ、これも買ってきた。しばらくして京都にいる兄から今度は「アンナ・カレーナ」を兵営に送ってくれた。上下二冊になっていたと思う。丸善の紫色の商標がはってあった。私が兵隊時代に、この叢書でよんだトルストイはこの三冊である。

今までは、まるきり書目になかった大陸ものの近代小説が、この叢書で買えるのが、ぼつぼつ出てきたのは、便利であった。

エヴェリマンの社史をみると、第一期の百冊は英米の十九世紀文人の詩や小説や論文を主として、若干のギリシャ、ローマの古典が加わり、第二期も同様で、第三期の百冊にはダンテ、セルヴァンテス、ゲーテ、ユーゴー、デュマ、イブセン、バルザックなどが加わった。そういえば私はユーゴーの「海の労役者」は、これだよんだ。

ロシアのトルストイ、ドストエフスキイ、ツルゲエネフの三尊が加わってきたのは後半期の五百冊目以後で、先頭をきって「罪と罰」が一九一一年に出たのだそうである。

私がよんだ「罪と罰」は、表紙一ぱいに斧をもったラスコリニコフを安っぽい色でかいた本であった。これは英訳が久しく絶版になっていたのが、久しぶりで複製されたのである。この書とエヴェリマンのと、中の文章は同じようだ。

ロシア小説の英訳では、当時ガーネット夫妻のがいいということで定評があった。「カラマゾフの兄弟」と「つかれた者」は、エヴェリマンもガーネット夫人の訳を採用している。しかし、その他の作は、訳者がまちまちで、ことに「罪と罰」などは訳者名がない。日本の出版者なら、事大主義で、いいと評判のある訳者の名をそろえようとする。実質は代訳で、わるくたって平気なのだ。

エヴェリマン叢書にはそういう形式主義なところは、少しもない。おかげで思わぬやくに立つこともある。

内田魯庵が初めて「罪と罰」(明治二十五年)を訳した時、ラスコリニコフが家庭教師にもゆかず、家にくすぶりこんでいるのを、女中がいたい何をしているのだときくと

「考える事をしている」と答えた。

北村透谷が、非常にこの言葉に感心したいきさつは小説の「春」のなかにもかいてある。又透谷自身の文章にも再三、くりかえしている。これは思想も一つの行為あるいは仕事とみた点で、とくに注目すべきことだが、ガーネットの英訳ではこれが、“I am thinking”となっている。デヴィッド・マガーシャックの最近の新訳もそうだ。これなら「私は考えている」と訳しそうで、魯庵翁も果して「考えることをしている」と名詞にして訳したか、どうか疑わしく、透谷も感心することがなかったかも知れない。ところがエヴェリマンの無名氏訳は、ただ“Thinking”とだけある。これなら「考えること」と訳しそうで、魯庵の初訳の時のテキストは、これだったと推定される。もとは、たしかヴィゼッテリイ版で、一ばん古いものだ。それだけに、訳としていか悪いかは疑問だけれど、非常に研究用にはなる。

マアカス・アウレリアスの「瞑想録」も、マッシュ・アーノルドが論じている二つの訳でなく、メリック・カサウボンという吾吾がきいたこともない訳書が平気でおさめられているところが面白い。但しこの訳はよみにくくて、あんまりいいと思わなかった。

私たちが買いはじめたころのエヴェリマンは、一冊が九十銭か一円ぐらいだった。ところが第一次大戦の好景気のとき、一冊五十銭に落ちたので、非常に安くなった気がして、私のいま持っているのは、当時買ったものが多い。

読書力のおそい私は、大してよみもせぬが、よんだ中で何が面白かったといわれると、リュイスの「ゲーテ伝」などは、非常に興味をもった。これは古本屋で買ったので、今日出海氏の旧蔵だったとみえ、その署名がある。

以上でこの記事はおわるが、中村春太郎社員の話にこういう一節がある。(早稲田大学図書館紀要・第七号「思い出ばなし洋書輸入六十年」)

それは坪内逍遙博士がある時、エヴェリマン叢書の一冊を買うと八百の番号がうってある。そこで急に思いついて、これをそろえてくれ、中が欠けているのは本社にたのんで必ず補充することと厳重にたのんだ。これは自分によむのでなく、熱海の双柿舎にくる学生たちが読むために、備えておくとのことであった。そしてこの中村談話によると、そのころになってこのエヴェリマン叢書を、ワンセットそろいで買ったのは、坪内博士をのぞいて、岡倉由三郎教授、犬養(毅?)と、三、四人しか記憶に残っておらぬとの事である。

三 レクラム叢書

レクラム版(坊間では普通にこう呼んだものだ)の創刊は、丸善の設立より二年早く、そして初めていつごろから丸善に入ってきたのか、確認すべき資料がない。

森鷗外の名訳「即興詩人」の底本が Der Improvisator. Roman von H. C. Andersen Frei aus dem



古いレクラム叢書

Dänischen übersetzt von Denhardt. Leipzig Druck und Verlag von Philipp Reclam Jun [Sans date]とあってレクラム本であるこ

とは、原本が今も東京大学付属図書館に所蔵せられているので明かである。(島田謹二著「近代比較文学」による)しかし鷗外はドイツ留学中に購読したので、丸善で入手したのではなく、帰朝後も鷗外は独自のルートから書物を取りよせていて、丸善を煩わした痕はほとんどない。

しかし日露戦争前後から、一高や東大でドイツ語をならいたての若い学生が、安価で名著がたやすく買えるのを便宜とし、丸善でしきりにレクラム本をあさりだした。

「私はあの時代、日本語の翻訳がほとんどないので、丸善へよくレクラムを買いにいった、トルストイなどもたいいていレクラムでよみました。僕は外国の本を読んだのは、やはり、こっちは余り語学はできなかったけれども、それでも日本語で読めない。僕はドイツを少しやっていたので」

と語るのは作家の武者小路実篤氏で(直話の録音による)、また「一高に入って初めて洋書を買った。それはレクラムであった。そ

れでもあこがれてゐた洋書の部類に属するのである。大枚十銭でゲーテやシルレルが手に入ることは、全く不思議なことであつた。寮費を加算して月十四、五円の学費では、勢ひレクラムに集中する外はなかつた。

細字で行間をつめて組んだレクラムからは精神文明のかほりが横溢してゐるやうに思へた。樺色の簡素なしかし良質の表紙は、独逸文明の堅実さを象徴してゐるやうであつた。

大戦後レクラムの紙質が他の書物と同じやうに落ち、表紙のデザインも変つたことは、一種のさびしさを感じさせた。それは大震災前のうす暗い古典的にどっしりしてゐた丸善が、今の明るく然し奥行きのない大衆的な感じの建物に模様換えをしたと同様にさびしいことであつた。」〔学鑑〕昭和十八年十二月「洋書のにはひと」と元の最高裁判所長官の田中耕太郎博士は熱心にレクラムを渉猟した感激をかたっている。一高ではこれを教科書にもちいたので、学生たちに親しみが深かつたのらしい。

「そのころは、翻刻の教科書がドイツ語では特に少なかつたので、教科書にも原書がよく用いられた。漱石の『三四郎』の偉大な暗やみこと岩元禎先生は、三年の時、シラーの『ヴィルヘルム・テル』と『ヴァレンシュタイン』をレクラムで教えられた。まさに大学なみである。レクラムは星ひとつ、当時たった二十銭だった。二十銭で西洋の大傑作の原文が読めるのだから、たいへんありがたいことであつた。紙表紙の仮とじだから、毎日使っていると、ばらばらになつた。それでもその本はまだ私の本だなにならんでいる。シラーの名作を原文で読むことには、やはり感激をおぼえた。わからないなりに、たいしたものだという気がし、格調の高い名文を、仰ぎ見るように感嘆した。岩元先生がひとりで、我流の発音で読んで、古風なことばで訳していくので、



レクラム記念出版 左 西独版 右 東独版

どんだんはかどって、『テル』五章をあげてしまい、

『ヴァレンシュタイン』に進んだが、この方はいく

らもやらないで、卒業となった。」「レクラム本」

高橋健二「学鑑」丸善創業一〇〇年記念号）

この叢書を最も多く消費し、その恩恵に浴し、それに

よって次代の文運を培ったもの、あるいは弊衣破帽の一

高生であつたろう。

正しい名称は Reclams Universal Bibliothek で、

その創始者のアントン・ビリッフ・レクラムがライプチ

ッヒで出版をはじめたのは一八二八年で、それから約四

十年の後に、この世界文庫をはじめるにあたり、ゲーテ

の「ファウスト」を第一冊とし、それから世界各国にわ

たって、宗教、哲学、文芸、科学、その他文化全般にわ

たる名著を、搜索し、網羅した。一九四三年のライプチ

ッヒ空襲による壊滅までに七千六百星ナムバを数え、

二億八千万冊を売った。

終戦後、東独では元どおりライブナチヒに、そして西独では創始者の孫のハインリッヒ・レクラムが再興し、ともに元の繁昌をとりもどして、西独で発行したものだけでも二千種に達し、一億一千万余冊を売った。一九六七年が創刊の百年に達し、西独東独ともに別々に詳細をきわめたレクラム版百年史を出版している。これで見ると、エヴェリマンもそうだが、中国や日本など極東の書物は全く拾いあげられないか、あるいは採録されること極めて稀のようである。

ついでを以て云っておくが、有名な文庫は必ずしもエヴェリマンとレクラムのふたつでなく、ボーンズ・ライブラリー、カッセル・ナショナルライブラリー、スコット・ライブラリーその他が明治文化を惠福したことは、上記の二叢書にまさるとも劣るものではない。

中でもすぐれていたのはボーンズ・ライブラリーである。

Standard works of English and European Literature on History, Biography, Topography, Archaeology, Theology, Antiquities, Science, Philosophy, Natural History, Poetry, Art, Fiction with Dictionaries and other books of reference: Comprising Translations from the French, German, Italian, Spanish, Scandinavian, Anglo-Saxon, Latin and Greek.

と題した扉をつけて、「学鑑」(明治三十七年八月号)に全書目がのっているが、それだけでじつに五十頁を占める盛観である。そしてカーライルとエマソンの讃辞が付載してある。

「ボーンズ刊行の諸叢書の、すべての書冊について、私が安んじて云い得るのは、知る限りの最も有用なもの

だといふことだ。」(カーライル)

“I may say in regard to all manner of books, Bohn's Publication Series is the usefulest thing I know.”—Thomas Carlyle

「ボーンズ・ライブラリーのまじめな、時としてすばらしく傑れた翻訳は、鉄道が国内交通になしとげたことを、文学の分野でなしとげた。」(ヘマン)

“The respectable and sometimes excellent translations of Bohn's Library have done for literature what railroads have done for internal intercourses.”—Emerson

いまの世なら、よっぽどの文豪が提灯記事をかいても、蚊がとまったほどの印象もあたえぬが、チェルシーの賢者とコンコードの哲人が口をそろえてはめているとなると、やっぱりそれだけの価値があったのだ。Bohn's Standard Library が代表的出版で、布装の今みてもゆかしい本である。しかしこれは七シリングで少し値がはるので、一シリングの cheap series があり、別に Bell's Indian and Colonial Library も一時おびただしい量が日本にはいつて来た。ボーンズ・ライブラリーの発行者が George Bell なので、植民地版にはベルの名を冠したのである。日本でもこれにならって中国、韓国、その他にゆく廉価なアジア版を刊行して、文化の普及をはかってもよいのではないか。惜しいことに、植民地版は大正はじめにはすでに姿を消し、ボーンズ・ライブラリーも、第一次大戦後に表紙が簡素に、用紙も薄手になって安っぽく変貌し、間もなく輸入がなくなった。

Cassell's National Library は学生のあいだで、一般にカッセル本と呼ばれていた。掌大の小型本で、体裁は

レクラムを学んだのではないかと思えたが、收容しているのはことごとくイギリス文学であった。安価で初めはたしか一冊十銭で買えたからわが国では学校の教科書として重宝がられ、早稲田でシェークスピアを講ずるのにも、坪内逍遙は自分で書きこみをいっぱいにした大きな註釈本をたずさえて来たが、学生にはカッセル本をもちいさせた。本国でもそういう使用が多いと見え、後にはもと白色であった表紙を赤にして線条を入れ、截ち落しを少くしてマージンを広くして、書きこみに便した教科書用版が出来、しだいに値が上って一冊三十銭ぐらいにまでなった。島崎藤村や馬場孤蝶などの「文学界」組が感激してゲーテの「ウェルテルの悲しみ」の英訳を廻しよみしたのは、このカッセル本であったと伝えられているが、果してゲーテの英訳がこの叢書にあったか、どうか。ここからは又「カッセル・マガジン」と題し、ちょっとという明治時代にあった我が「趣味」という雑誌を思わせる高雅な月刊誌が出ていて、これ又一時ひろく愛読せられた。

スコット・ライブラリイは上布製で気のきいて、携帯に便利な可憐の美本である点では、あらゆる叢書中、群をぬく。ボーンズ・ライブラリイのように書目が多くないかわり、じつに気のきいたものが入っているのでサヴエージ・ランドアの「空想の対談」などその一例。ルナンの「耶蘇伝」「マアカス・アウレリアス」「アンチ・キリスト（ネロ伝）」などから、サントブーヴの論文集の英訳など、明治から大正にかけて、この叢書でなくては手に入らなかった。漱石の「虞美人草」の甲野さんの日記に出てくるので初めて広く知られたレオバルディの感想集の英訳も、当時はこの叢書以外には見つからなかった。

「その間（文学少年のころ）にたった一冊だけ、しみとおるよういつまでも残っているのは、ろくろく辞書

も使わずに全体をよみとばした『ジェーン・エア』だけである。スコット・ライブラリー版である……

こういう思い出があるせいか、スコット・ライブラリーは、読めもしないのにかなり数多くを集めた。ウィリアム・シャープの編んだ『イギリス アヘン喫煙者』、ハベロック・エリスの編んだ『架空の対話集』、アーネスト・リースの編んだ『ポー短編集』などで、あの叢書は、ジャーナリストのアーネスト・リースが企画して、初めはキャメロット・シリーズという題であったのか。その頃神田の古書店街を歩くと、どこにもごろごろしていたエドマンド・ゴッスの『北方研究』というのなど、いつでも買えると思っているうち、とうとうその機会がなく、むなしく歳月をすごしてしまった。この頃ふとした機会からゴッスを集めて読み返すようになった時、キャメロット版の『北方研究』を手に入れて、少年の夢を実現したのは我ながらいいらしい。それに励まされて、スコット・ライブラリーをあらためてさがしてみたが、思うように集まらない。ジョン・アディントン・サイモンズの編んだ『医師の信仰』やアーサー・シモンズの編んだ『リーハント・エッセイ集』、リチャード・ジェフリーズの編んだ『セルボーン博物誌』、イエーツの編んだ『アイルランド仙女譚民話集』などは、ぜひもう一度手にとってみたいものである。」(島田謹二「学生のころ読んだ洋書」・「学鐙」丸善一〇〇年記念号)

ここに言及されているカメロット・シリーズの中では、おそらく Savage Landor の Pericles and Aspasia という書翰体の物語が珍中の珍であろう。アスパシアはギリシャのアテネの妓女で哲学者であり、ソクラテスも彼女と談論することを最も好んだ。後に政治家のペリクレスに嫁し、ギリシャ第一の雄弁家という名を残している彼の演説草稿もなかばはアスパシアが書いたのだといわれる。そのランドアの「ペリクレスとアスパシア」の一、二の

断章を平田禿木が早く「文学界」に訳出しており、こんな原文が何書に見つかるのかといふかったが、この叢書にあるのだった。

思出してみると、明治時代、わが文化に貢献した叢書にも、いろいろなのがあったが、いつとなく消えて、残るのはレクラムとエヴエリマンばかりである。いまはモダン・ライブラリが幅をきかせ、ペンギン・クラシックスに至っては、丸善店頭の一隅に氾濫している優勢さである。明治時代に出たヨーロッパの叢書は、どんなに優秀でも、東洋古典を無視していることは前にいったが、そこへゆくと大正の産物なるアメリカのモダン・ライブラリ、第二次大戦直前に急に擡頭したイギリスのペンギン・ブックは、前者が二葉亭四迷の「その面影」(アダプテッド・ソン、三井武八郎英訳)を早く取り入れたのには驚かされた。しかし売れなかったと見え、すぐ絶版になったのは是非もない。後者は「老子」「孔子」をはじめ、続々と中国古典を、しかも新訳で提供してくれるのはたのしい。

四 自然主義の外護者

この年はまた自然主義が勃興して天下の耳目を聳動した年として知られる。鳴動は数年前から少しずつ起っていたが、戦争の終結とともに、爆発して噴煙を天にあげる姿となった。根拠の薄弱な理想、むなしき幻影、たよりない信仰——血で血をあらう真剣なあらそいは、そうした虚偽の外飾を一さい剝落して人間赤裸々の姿の直視を強要した。これはまず文学にあらわれ、ひいて哲学や倫理に及ぼし、しだいに絵画や音楽にまで影響していった。モダン・ニズムはそれまで紹介として、知識としては日本に入っていたが、日本の全文化の上に、身をもってそれを体験

させたのが自然主義だった。言葉をかえていえば自然主義は全日本にモダーニズムのきびしいシゴキを与えたのだ。その機関誌たる役割をつとめたのは、つとに文学史の指摘しているとおり、早稲田文学、太陽、文章世界に読売新聞の週一回の文芸付録欄であったが、その外護の任にあたったのは「学鐙」だった。

文章世界は、この年（明治三十九年）四月に創刊せられた云わば戦勝の余勢の新雑誌である。はじめは商店の丁稚などを読者にめざす実用文雑誌として計画されたのが、うぐいすの巢からほととぎすが孵りだしたように、新興自然主義の機関として似ても似つかぬ使命を帯びるにいたったのも、めぐり合せであり、また時勢である。

文章世界は中学上級、師範学校生などのあいだの文学好きには、金科玉条のように尊崇され、熱読せられたものであり、編集上手な記者は、さまざまな膳立てをして、彼等の要求や熱望に応ずる工夫をした。そのひとつとして「文章顧問」という欄を設置し、読者からの質問に応じて答をしたのだが、その中にこういう問答がある。

問 尋中卒業ぐらいで解し得る平易な英詩集二、三部おしえて下さい。そしてどこで買えるかも。（柴田義久）

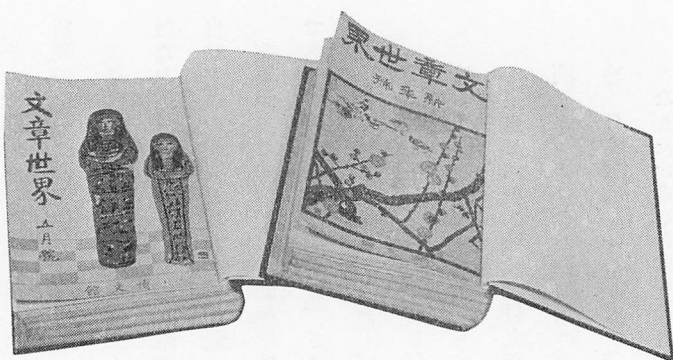
答 米国の詩人ロングフェロー、英の詩人ゴールド・スミス、オラヅオース等の全集がよいでしょう。直接に

東京日本橋区通三丁目丸善書店に問い合せ給え。（文章世界明治三十九年九月号）

問 オットウのお伽噺集の定価および該書販売店お知らせ下され度候（下総、梅溪）

答 日本訳はないそうです。独逸の原書も果して日本にきているか、どうかはわかりませぬが、ぜひお求めになりたいのならば丸善書店に問合せてごらんなさい。定価は三、四円（同号）

この年に丸善の名が出ているのは、この号だけであるが、それから数年にわたって、甚しい時には連月、丸善の



「文章世界」

名があがっていない事はない。前の問の尋中とは、もとは中学校を尋常中学校とよんだ略語で、明治後半期の中学卒業生というのと、ほぼ同程度の英語学力である。

つまり洋書の買いはじめに、丸善でレクラムを求めた田中耕太郎博士（これは非凡の語学力のもち主で一高卒業記念に訳したドイツ書の訳稿を森鷗外博士に斧正をもとめた所、上出来なりといって些少の加朱があったのみだと、当人から聞いたことがある）などのような一高という秀才コースから、また一段ひくい読書生を丸善に案内したことになるので、些末な記事のようだが、丸善史の上にはひとつの意味をもつ。現にこの筆者などが、丸善を知ったのは、文章世界によるので、つまりこのころ東京本店と大阪・京都の二支店だけしかなかった丸善の存在を、地方にまで紹介し、開放したのだ。

五 文章世界の「文章顧問」

しかも、この「文章顧問」の問答では、わざとそうしたのか、あるいはほんとうにそうだったのか、ヨーロッパ近代文学の質問が多く、その

解答を見て、吾々はツルゲーネフ、トルストイ、チェホフ、ドストエフスキイ、ハウプトマン、ゾーデルマン、ゾラ、フローベル、モオパッサンなど著名作家の名作の英訳名や代価まで教えられ、またそれが丸善で得られることも承知した。

文章世界は翌々明治四十一年五月に「近代三十六文豪」なる臨時増刊を刊行し、これはじつに、明治末期の文学青年のもつ海外文学知識をゲーテ、シルレル、ユーゴー、デュマ、スコット、テニソンの知識から急転してモダインの諸作家ボードレール、ドストエフスキイ、ニイチエ、モウパッサン、メーテルリンク、ダヌンチオなどの方へ切りかえるに劃期的な役目を果たした。しかし見きたれば内田魯庵が「学鐙」の編集にあたりだしてから、その誌上で個別的に紹介したものを、綜合したので、文章世界のある部面は、「学鐙」の分店のような観を呈した。それを逆にすれば「学鐙」は自然主義の宣伝に有力なる片棒をかついでいるのである。

「学鐙」が「六十周年記念特集号」（昭和三十八年十月）を出し、巻末に総目次をのせているのを見た或る評論家が「さすがは魯庵の編集見識だ。自然主義系統の人には執筆させていない」と感心し、「学鐙」が、当時のこの新興思潮と無関係であったのをたたえる一文を書いていたのを見た記憶があるが、それは全く逆である。当時、一般の目には「学鐙」は雑誌として自然主義の進展に歩調を合せているかの観を呈したもので、内田魯庵は同主義の有力な外護者であったのだ。現に、自然主義の親身の伯父さんだと、魯庵のことを書いた記事が雑誌に載っていたのを記憶する。もちろん陣頭に立って露骨に主義宣伝戦を展開したのでないことは、商社の広告誌として当然だが、しかし先んじて丸善の書物をイギリス文学から大陸文学に切りかえ、文壇をもその方へ徐々に誘導し、間接に自然

主義の有力なヒンターランドとなったことは、日本文化の進歩的展開に寄与したものととして、その歴史に万丈の光彩を添え、店が大いににぎやかに繁昌するという経済的効果も大であった。